**増田　手古奈 （ますだ・てこな）**

**１、プロフィール**

俳人。師の高浜虚子より「東北の重鎮」と評され、ホトトギス系俳誌「十和田」の主宰として､長きにわたり客観写生の俳句の道を広めた。

＜生没＞

1897（明治30）年10月３日 ～ 1993（平成５）年１月10日

＜代表作＞

『手古奈句集』『合歓の花』『定本増田手古奈句集』『山荷集』『つらつら椿』

＜青森との関わり＞

南津軽郡蔵館村（現大鰐町）生まれ。昭和６年に大鰐町で俳誌「十和田」を発行主宰する。

**２、作家解説**

本名は義男。大正11年に東京大学法医学教室で血清学の研究をしていた時、同じ教室にいた水原秋桜子に強く勧められて高浜虚子の門に入る。大正12年、真間の手古奈堂（千葉県）吟行にちなみ、手古奈の俳号が生まれた。時は虚子門ホトトギスの四Ｓ台頭の時代であり、手古奈はそれにつづく新人として、ホトトギス俳句興隆のために活躍した。

昭和６年、家業を継ぐべく郷里の大鰐町に医院を開業。この年の１月に東北では唯一のホトトギス系の俳誌「十和田」を創刊した。秋桜子・誓子・青邨・素十らが近詠を寄せ、普羅・たけし・泊月らが続々と手古奈を激励に訪れ、創刊期を支えた。以後60年あまりの長きにわたり、手古奈は客観写生の俳句の道を広め、「十和田」は平成５年５月の734号で終刊となった。句碑は30基を超え、昭和51年には大鰐町の名誉町民第一号の称号を受けた。

手古奈の句は簡潔ですっきりしていてリズムがあり、高浜虚子は『手古奈句集』の序文に次のように記している。「その句は常に平常心を失はない。壮大な景色、大きな活動を描くにしても、悠揚として迫らない。巧みな叙法といってもけれんは少しも無い。どことなくゆったりしてゐて、大人の風格があると云へる。斯くして手古奈君はとこしへに東北の俳諧の重鎮たるを失はない。」と。

**３、資料紹介**

〇『定本増田手古奈句集』

図書

1969（昭和44）年４月20日

215mm×160mm

俳誌「十和田」40周年を記念し発行。序(高浜虚子)は『手古奈句集』のものを再録､句は著者自選の723句を収録。全体を「蕗の雨」「合歓の花」「大月夜」に分け､制作年代・場所を付す。巻末には諸家による「手古奈俳句鑑賞」､略年譜を掲載している。